秘密のキスの続きは熱くささやいて

藤谷 藍
Ai Fujitani

Eternity
EB
エタニティ文庫

目次

秘密のキスの続きは熱くささやいて　5
十年越しの愛の行方　315
書き下ろし番外編
キスより甘い新婚の一日　347

秘密のキスの続きは熱くささやいて

1　ある日パーティは突然に

まだ、暑さが抜けきらない十月初めの正午過ぎ。
季節は秋だというのに、コンクリートに反射する照りつけのせいか、部屋の中はやたらと暑かった。
汗ばんだ額に猫毛気味の細い毛先がひっつきそうで、扇風機をつけようかなと、美夕は手に持った段ボール箱をいったん下ろした。
黒っぽい茶色のセミロングの髪も、うなじにかかりベトついている。ポケットから髪留めを取り出した美夕はクルッと髪をまとめた。
小さな窓を開き、箱を抱え直したものの、それをどこに置くべきかと周りを見渡す。
ここは都内の三階建て商業ビルの二階にある、小さな部屋だ。
今日からここが美夕の我が家になる。そして当分は、この畳部屋で暮らすことになるだろう――そう思うと、美夕の口から思わず長い溜息が漏れた。
不可抗力とはいえ、一度は出て行ったこの部屋にまた舞い戻る羽目になるとは……

ただでさえ狭い部屋には、衣類ラックがぎっしり並べてあり、そこには男女の様々な衣類がハンガーにかかっている。が、これらは美夕の持ち物ではない。父が経営する小さな会社の備品である。
今年二十六歳になった美夕の仕事は、ジュエリーデザイナーだ。
なぜ駆け出しのデザイナーである美夕がこんなところにいるのか。それは、シェアメイトが見つかるまで、生活を節約モードに切り替えたためだ。
ジュエリーデザイナーという自分の夢へ向け、美夕は都内のデザイン専門学校を卒業し、さらに海外の専門学校でも学んだ。その後は、つてでイタリアに渡り、三年間工房で見習いとして働くことに。その途中でオリジナルジュエリーブランドを立ち上げたのだが、帰国後二年経って、やっと収入が安定してきた。なので今ここで、財布の紐を緩めるわけにはいかない。
美夕は改めて、多少の不自由は我慢する決心をした。
二年前の帰国後当初も、父の事務所の衣装部屋――つまりここに住まわせてもらった。
バイトをしつつ節約に努め、ネット販売でオリジナルジュエリーを売り、一年かけてようやく固定客がつくようになった。そうしてブランドが軌道に乗りだすと、折よく父の会社に登録している劇団役者の一人とルームシェアすることになり、この事務所での寝袋生活を終えたのだ。

だが、それからまた一年後の今日、今度はシェアメイトがめでたく彼氏と同棲することとなった。

再び引っ越しを余儀なくされた美夕は、商売上宝石を扱うので知らない人とシェアをするわけにもいかず、次に住むところが見つかるまで当分、寝袋生活に逆戻りだ。

ふと思いついてスマホを取り出し、賃貸情報を再度チェックしてみる。しかし、美夕の慎ましい予算に合う物件はやはり見つからなかった。

ジュエリーデザイナーである美夕は在宅勤務が基本だ。それに常日頃から貴金属や宝石を扱う仕事だから、下手なところに住むわけにはいかない。

けれども、自分の店を持つという長年の夢を叶えるために、今は余計な支出は控えたい。

（大事な時期だもの……ちょっと狭いくらいなら平気よ！）

何しろ、ここの部屋代はタダなのだ。

こんなありがたい環境に感謝すべきと思い直し、美夕は引っ越しの片付けを再開した。

すると、にわかにバッグの中からメッセージの受信音が聞こえてくる。

（あ、織ちゃんからだ）

荷物をまたいったん置いて、高校時代からの親友である西織夏妃からのメッセージにさっと目を通した。

『引っ越し済んだ？　今回の試作ちょっといいわよ～、もう自信作！　出来たら連絡するわ！』

夏妃の興奮した様子が、躍っている文面から分かる。美夕は自然と笑い出しそうになった。

同じデザイナーでも、夏妃は服飾デザイナーだ。自分もそうだが、アイデアが固まりノッてくると、そればかりに夢中になり他のことはおざなりになってしまう。性格は美夕とまったく違うのだが、仕事に対する姿勢は非常に似通っていた。

そして夏妃も、オリジナルブランドを立ち上げている。二人はビジネスパートナーとして二つのブランドをタイアップさせていた。なにせその方がお互い刺激にもなるし、時々コラボして新作発表などを共同で行うと、ブランドマーケティングとしても高い効果が見込めるからだ。

『ほぼ終了よ。織ちゃんの新作ドレス、楽しみにしてるね』

返信を打ち終わると、今自分がいる部屋をぐるっと見渡す。ふうと溜息をついた後、段ボール箱を衣装部屋の片隅に運び込んでいると、「美夕ちゃ～ん」と野太い声で名を呼ばれた。

何事？　と思い振り向くと、見た目は美丈夫な男がこちらに駆け寄ってくる。そしていかにも芝居掛かった仕草で、縋るように泣きついてきた。

「美夕ちゃ～ん、ちょうどよかったわ！　今日あなた暇よね？　ちょっとお父さんの会社のバイトでパーティに出てちょうだい！」

そう、この野太い声でオネエ言葉をしゃべっているのは、美夕の父親である。

「は!?　バイト？　って、まさか……？」

父親はバーを経営しながら、役者を派遣する会社も経営している。社業は依頼者が希望する役柄を演じる役者を派遣するビジネスだ。ストーカーに困った男性の恋人役から、客寄せさくらの役であったり、今回依頼があったようにパートナー同伴のパーティに出席するための相手役だったりする。

どんな役を演じて欲しいかを依頼者に細かく注文されるので、役者の卵たちにとっては演技の勉強をしながらお金が稼げるという、ありがたいものらしい。

だが演技が苦手な美夕は、父の言葉を聞いた途端、いやそれは絶対無理だからと心の中で全力で拒否した。

それに、だ。突然の窮地とはいえ、「もうパーティまで時間がない」と縋る父の嘘泣きは、ありえないほどわざとらしすぎる。かくして、愛情溢れる親子の小さな攻防戦がここに始まった。

後ろでまとめたセミロングの髪が乱れるのも構わず、美夕は父親に食ってかかる。

「だ・か・ら、何で私がそのパーティに行かなきゃいけないのよ。他に適役な女性役者

さん、いっぱいいるじゃない！」

演技なんてとんでもない。ましてやパーティなど……

（絶対いや、知らない人に囲まれて、愛想笑いの連続なんて……）

そんな疲れることを、何でこの引っ越しですでに疲れ気味の日にわざわざやらなくてはいけないのか。

「だって美夕ちゃん、クライアントに出された条件に合う娘が、急に病気になっちゃってね、手の空いてる適当な役者が見つからないのよ。美夕ちゃんなら条件にぴったりだし……ね、お父さんを助けると思って、引き受けてちょうだい」

父は哀れな声を出して頼み込んでくる。

「信用第一なのよ、この商売。お客様の信用は裏切れないわ。もちろん美夕ちゃんも分かってくれるわよね？　それにもう依頼料いただいちゃってるんですもの。向こうも、急な依頼で無理言って申し訳ないとおっしゃって」

（うっ、痛いところを……信用と言われると、強く出られないの知ってるくせに）

結婚指輪の嵌まった骨ばった手で美夕の腕にしがみつき、こちらをウルウル目で見てくる全然可愛くない父親へ言い返す言葉に詰まった。

ジュエリーデザイナーとして、ようやく一人前の稼ぎを手に入れつつある美夕には、父の言葉は痛いほどよく分かる。

美夕のビジネスも信用第一だ。
一瞬怯んだ美夕の隙を狙い、父の甘い言葉は続いた。
「ね、ほら、今日からここで自炊しなきゃならないんだし、パーティに出席すれば、ご飯代浮くわよ～」
（ううっ！　確かに、ご飯代は浮くかも。でも、正直めんどくさい……）
節約にせっせと努める美夕を、巧妙に説得してくる。そしてそれでもなかなか首を縦に振らないと分かると、父は泣き落としをやめ、今度は良心に訴えてきた。
「ねえ、美夕、あなたがわざわざデザインの勉強をしたいって言うから、その費用をやり繰りしてあげた父さんの頼みなのよ。まさか断ったりしないわよね」
（あっ、これは詰んだわ……）
デザイン専門学校に通わせてもらった学費は、まだ返しきれていない。結局美夕はしぶしぶ頷いた。
「分かった。でも、私、お芝居は勉強したことないから、上手く出来なくても知らないわよ」
負けず嫌いなところがある美夕の珍しく不安そうな言葉に、父はニッコリと安心させるように笑った。
「大丈夫よ。美夕は父さんと母さんの愛の結晶なんだから、自然に役に溶け込めるわ」

美夕の両親は若い頃、共に劇団役者だった。
父は突然の病で亡くなった母にいまだ操を立て、結婚指輪を片時も外さない。両親の夢であったこの会社を始めてからは、「この役は奥が深い」と言ってオネエ社長を演じていた。
（はあ～、逆らえません、借金には……しょうがないな）
盛大に溜息をつき、潔く頭を切り替えた美夕は、父に依頼内容を聞いた。
「で、今回はどんな女性をご希望なの？　いつどこに行けばいいわけ？」
やっとやる気になった美夕に、父は喜んでいそいそと答える。
「今回は美夕ちゃん、役得よ。依頼人は、それはそれはかっこいい二十八歳の男性だから。それに彼ったら、プロの声優も真っ青のイケメンボイスの持ち主なのよ」
可愛くないウインクを娘にサービスする父だったが、ジト目で睨んだ美夕の気が変わらないうちにと思ったのか、慌てて言葉を続ける。
「希望は二十五から二十八歳の女性で、外国人の交じっているビジネスパーティでも物怖じせずしゃべれること。英語がしゃべれればなおよし。もちろん、依頼人の恋人役よ。ホテルで開かれる正式なパーティだから、かかる衣装代も向こう持ち！　服装はセミフォーマル、ちょっと華やかなお出掛け用のドレスって感じかしら？　着物でもOKだけど、着崩れしたら自分で直さなきゃいけないから、美夕ちゃんはやめた方がいい

わね」

着物なんてとんでもない。ブンブンと美夕は首を振る。

「パーティは、今日の夜六時半から九時まで。国内外から建築関係の業界人が集まるものだそうよ。始まる三十分前に、直接会って打ち合わせをしたいそうなの。依頼人は深田さんをデータベースから指名したんだけど、最終候補には、前川さんと西村さんも残っていたわ。どんな感じの人が希望か、これで大体分かるでしょ」

分かる分かる。父が名前を挙げた三人は、凛とした有能そうな女性で、それでいて親しみやすい雰囲気を持つタイプだ。指名された深田さんはハーフで英語が堪能。他の二人も物腰は柔らかだが、社交的ではきはきとしたしゃべり方をするので、業界のパーティでも臆することなく役をこなせるだろう。

（だけど、この恋愛音痴の私に恋人役って――無理がありすぎ……）

自慢じゃないが、これまでお付き合いで長続きしたためしがない。美夕は、自他共に認める筋金入りの恋愛音痴だった。なにせ、交際相手とはキスより先に進めないのだから。実はキスでさえも好きではなく、どんな相手でもそれ以上のことをしたいと思ったことがない。

そこまで考えてから、ふと過去のことが頭に浮かんだ。

（いやいや、あれは高校の時だし……）

十年も前のことなのに、なぜか今でも時々思い出してしまう懐かしい顔を無理やり意識の外へ押し出す。

生ぬるい感傷に浸っている場合じゃない。今は目の前の問題だ。

「今更だけど、何で前川さんか西村さんに持っていかないの？　この話」

「二人とも、もう予定が入ってて、今日はダメなのよ。他の人たちでは依頼人の希望条件を満たせないわ。美夕ちゃんが一番理想に近いのよ。なにより可愛いし！」

確かに、自分は美しかった母のおかげで、化粧の仕方と髪形次第では可愛い系美人に化けられる。父に似た少しふっくらした唇や、顔が小さいことでやや大きめに見える耳は愛嬌で誤魔化すにしても……

猫毛気味のセミロングの髪にくっきりした目尻、ぱっちりした目元にちょんとした鼻。何となくロシアンブルー猫を連想させる美夕の容貌は、大人の女性なのに可愛らしい華やかさがあった。見かけはまあ、化粧で何とか出来ると前向きに考える。

ここでうだうだ考えても仕方ない。こうなったらすっぱり頭を切り替えてさっさと済ませよう。

夜六時半開始のパーティ、さらにその三十分前に打ち合わせとなると……美夕は素早く計算し始めた。が、そこであることに思い当たる。自分はセミフォーマルのドレスなど持っていない。

「今すぐ買い物行かなきゃ、間に合わないじゃない！」
時間を逆算した美夕は悲鳴を上げた。
（もう一時近くなのに、間に合うの？　これ……）
すると、父はさっとスマホを取り出し、タクシーを呼ぶ。
「さあ、行くわよ」と外に出てタクシーに一緒に乗り込むと、一番近いデパートに二人で駆け込んだ。
デパートで親子は、これでもないアレでもないと、客の要望を叶え、なおかつ美夕に似合う〝綺麗で可愛い大人のドレス〟を探したが、これといったものが見つからず、次のデパートへ行く相談を始める。
刻々と迫る時間に、「あ～、もう適当なドレス買ってアクセサリーで誤魔化す？」と悩んでいると、美夕のスマホが軽やかに鳴り出した。呼び出し名を見た直後、天の助け、とばかりに応答する。
「織ちゃん！　ちょうどよかった、ちょっと相談なんだけど……」
事情を話すと頼もしい友人は、問題ないと笑い飛ばした。
『ちょうどいいものがあるわ！　出来たてのドレス、今回の自信作よ。美夕に試着してもらおうと思って電話したんだから』
持つべきものはデザイナーの友達！

電話越しに「もう織ちゃんってば、ほんと天才っ！」とそのタイミングの良さを褒めちぎると、『ほほほ、当たり前よ』と高笑いが返ってきた。こうして美夕は夏妃に指示された靴だけをデパートで購入すると、父と一緒にタクシーで友人宅へと向かった。
その日の夕方遅く、支度を整えてすっかり見違えた美夕に、父は指定のホテルへ行くように指示した。
少し緊張気味にタクシーに乗り込むと、父は手を振り、投げキッスまで寄越して力づけてくれる。
「依頼者はホテルのロビーで待ってるわ。楽しんでらっしゃい、シンデレラ。十二時までに戻らなくてもいいからね」
（人の気も知らないで！　――ほんと父さん、恨むからね、失敗しても知らないから）
呑気にニコニコ笑い手を振って見送る父に、緊張を紛らわすことも兼ねて心の中で文句を言う。
そして、初めてのお使いのようにドキドキしつつ、美丈夫な男性から漏れたオネエ言葉に呆気にとられていた運転手にホテル名を告げた。
外の景色が次々と流れていく車窓に、天高くそびえるビル街が現れる。華やかなシティライトが煌めき、どこまでも続く高層ビル群を美しくライトアップしていた。

一流ホテルをタクシーの中から見上げた美夕は、握っていた手をゆっくり開くと、ホテルの入り口でタクシーを降りた。

さあロビーに、と緊張気味にヒールを鳴らし、ゆっくり歩いて中に入る。

パーティ会場のこのホテルは、名前だけは知っていたが初めて訪れる場所だ。

凝ったデザインの開放感ある入り口に、高い天井。高級そうな最新のインテリア。一泊の値段が美夕の家賃一ヶ月分は軽く飛んで行くだろうことは、一目で推測出来た。

（……これってもしかして、想像してたよりずっと大きなパーティなんじゃあ……）

その格式の高さに緊張が高まるが、いかにもこんなところは慣れているという顔をして、堂々とロビーに足を踏み入れた。

――が、ヒールの音も高く歩き出した途端、はたと足を止め、青くなる。

（しまった！　依頼人の名前聞くのを忘れてたわ！　えっと、確か父さんが、年齢は二十八歳でかっこいい男性と言っていたから、きっとものすごく男前よね）

役者を見慣れている父がかっこいいと言ったのだから、依頼人はかなりのイケメンだろう。

だが、ロビーには着飾った人たちが大勢いて、依頼人の風体に当てはまる二十代後半のイケメンを探し出すのは容易ではない。

（……これは、どこか目立たないところで、ちょっと様子を見た方が良さそうね……）

この人だかりをさり気なくチェック出来る場所に移動しよう。

美夕はそっとその場から離れると、ロビーの端まで歩いていき、そこから淡い照明に照らされたロビーをゆっくり見渡した。

すると、一人の背の高い男性が長い脚をゆったり動かしながら、まっすぐ美夕に近づいてくる。

その男性の自信溢れる優雅な動きに自然と目線が引き寄せられ、そして顔を確かめた途端、心臓が一瞬止まりそうになった。

（えっ!?　まさか……この人――）

思わず触れたくなる、さらっとして柔らかそうな濃い茶色の前髪。

長い睫毛に囲まれた漆黒の瞳に、涼しげな目元。その瞳はどこか甘さを湛え、高い鼻梁や男らしい口元には精悍さが溢れている。

だけど決して、優男という感じはしない。自分をまっすぐ見つめるその双眸は理知的な光を宿し、意志の強さをうかがわせ、彼を落ち着いた大人の男性に見せている。

柔らかい光に照らされた端整なその容貌は、イケメンという単純な言葉では表せない存在感を放っていた。

上背があり鍛えられて無駄なくすらっとしているが、どこか芸術家を思わせるストイックな雰囲気も醸し出している。年齢を超越した独特の雰囲気のせいか、彼はずっと

年上にも年下にも見える。
見れば見るほど、美夕は心の奥の魂を強く揺さぶられる。
大人の男性の色香を纏った彼は、目の前で止まり、こちらをじっと見つめてきた。こんな近くに来られると、背の高い彼の目線に合わせて自然とその顔を見上げる格好になる。いろんな感情が混じったようなその瞳から、どうして目を逸らせないのだろう。
「来生先輩……」
美夕は、十六歳の春以来長い間夢で悩まされた、その懐かしい姿に向かって、小さく呟いた。
（変わってない……それどころか、もっとカッコよくなってる）
最後の記憶に残る高校時代より、さらに男としての自信に溢れたその佇まいに、十六歳の時と同じように――いや、あの時以上にときめきを覚える。
それは美夕にとって懐かしくもあり、また新鮮でもあり、まるで身体中の細胞が彼の存在に反応しているようだった。
美夕が立ち尽くしていると、その男性はニッコリ美夕に笑いかけてきた。
「やあ、君が雪柳美夕さんだね。――子猫ちゃん。僕を覚えていてくれて、嬉しいよ」
あまりの驚きに、口をOの形にして固まっている美夕を上から下までじっくり眺め、その人は微笑んだ。

「君はあんまり変わってないね。高校の時以来だからさすがに記憶と違うかと思ったけど、あの時の印象そのままだよ」
ああ、懐かしい――この低く甘い独特の艶のある声。間違いなく、あの来生先輩だ。
果たして褒められているのか、それとも貶されているのか……どちらにも取れる彼の言葉だったが、美夕はいまだに目の前の現実に頭がついていけず身体が固まったままだった。
見た目の反応が乏しい美夕に、その人は次第に眉を寄せて瞳を曇らせた。
「子猫ちゃん、僕を覚えていないのかい？　さっき名前を呼んでくれたと思ったんだけどな。来生だよ。君より二学年上だった、来生鷹斗だ。久しぶりだね、今日はよろしく」
（今日はよろしくって――嘘っ！　そんなどうしよう!?　まさか、先輩が依頼人なの？）
こちらの反応をジッと待つ瞳を受けて、ようやく頭が現実に引き戻される。
しまった！　今はバイト中だった。
（先輩は大事な依頼人よ。ちゃんと挨拶しなきゃ）
「もちろん、覚えていますよ、来生先輩。本日は弊社のサービスをご利用いただき、ありがとうございます」
軽く頭を下げた美夕に、来生は笑いを漏らした。

「よかった、覚えていてくれたんだね。まあ、ちゃんとしゃべったのは卒業式の時だけだけど」

その屈託のない笑いは、まるで懐かしい同級生に再会したような温かさが感じられるもので、つい嬉しくなる。優しい態度で接してくれる彼が自分を覚えてくれていたことに、だんだん気分が高揚してきた。

「部活も違いましたし、接点はありませんでしたけど、先輩は一年生の間でも有名でしたから」

やっと反応し始めた美夕に、来生は目を細めて片手を差し出した。

「思い出してくれて光栄だよ。どんな風に有名だったのかが気になるけど、今は昔話をしている時間がないから、またゆっくり時間のある時に教えて。今日のことはどんな風に社長に聞いてる？」

美夕は差し出された片手を、ごく自然に握り返しつつ答える。

「すみません。時間がなくて詳しい内容は聞いてないんです。私が受けた内容は、今日の六時半から九時まで、建築関係の業界パーティに依頼人の恋人として同伴し、出来れば依頼人の挨拶回りのフォローをして欲しい、ということです。何か間違っていますか？」

「うん、それで合ってる。代理の人が君でよかったよ」

来生は頷くと、そのまま美夕の手を自分の片腕にかけ、エスコートをしながらエレベーターの方へと歩き出した。

「君の会社の社長からね、指名した女性が来られなくなったから代理人を寄越すと言われた時は、正直なところ、大丈夫なのかと思ったよ。けど、君なら知らない人じゃないし、やりやすそうだ」

エレベーターのボタンを押して待つ間、来生は自分たちの後ろに年配の夫婦や着飾った人たちが待っていることに気付き、小さな声で言った。

「続きは部屋に行ってから話すよ」

彼の美声が耳元をくすぐるように聞こえてくる。

（ふわぁ、十年ぶりの懐かしい感覚……ドキドキしちゃう）

心地のいい声が頭の中で反響して、鼓動が速くなる。

そうなのだ。美夕は、来生のこの低くて甘い、艶のある声にすこぶる弱かった。

こんな声でささやかれたら抵抗出来ない……そんな理想の声の持ち主は、その美声に負けず劣らずいい男で、美夕の通っていた高校で来生の名前を知らぬ者はいなかった。

当時は学校の中はおろか、他校にまでファンクラブがあり、バレンタインの日に群がった女生徒の数に唖然としながら校門を通り過ぎたことを覚えている。

だが本人は、美夕の動揺になどまるで気付かぬ様子で、混んだエレベーターの中で恋

人同士らしく腰に手を回し、自分の方へと引き寄せた。
エレベーターの浮遊感と共にチーンと音を立てて到着したその階は、パーティ会場のある大広間ではなく、客室のあるホテル上階だった。いつの間にか二人きりになっていたエレベーターから降りると、美夕の腰を抱いたまま来生は客室へと歩いていく。
ふかふかな絨毯の上を歩いていると、来生の美声が静かな廊下に吸い込まれるように響いた。
「受付は六時半からだ。まだ少し時間があるから、部屋で打ち合わせをしよう。こっちだよ」
そうして、いかにも高価そうなドアをセキュリティキーで開け、美夕を中に案内した。
スイートだと思われるそこは、落ち着いた雰囲気の部屋だった。入ってすぐにリビング、大きいソファーの向こうはダイニング。机の上に書類やノートパソコン、そして側に設計図らしきものが載っている。奥は広い寝室に続いていた。
来生はソファーに美夕を座らせ、自分もその隣に座る。
ロマンチックな柔らかい照明に照らされたソファーに、隣同士座る二人の距離が、なんだかやたらと近い。お互いの体温が感じられるほどだ。
（近い、近いよ、先輩。あ、でも今は恋人役だったわ）
美夕は多少戸惑いながらも、割り切ることにした。

「あまり時間がないから、手短に話すよ。今日のパーティは聞いての通り、主に建築業界の会社や建築デザイナーの集まりだ。今、世界的に動いているプロジェクト案件が何件かあってね、僕も建築デザイナーとして参加している」
（先輩、建築デザイナーだったんだ……すごいなぁ）
感心したような美夕の態度に、説明を続ける来生の目が和らいだ。
「こういう集まりは大切な情報収集の場だから、業界の人たちがたくさん集まるんだ。今日は社交がメインのパーティなんだけど、パートナーがいた方が社会的信用が増すんだよ。馬鹿らしいと思うかもしれないが、そういう保守的な風潮はいまだ残っているんだ」
なるほど、と美夕は彼の言葉に相槌を打つ。
「で、ここで君の出番となる。僕のパートナーとして僕が挨拶回りをしている間、相手に友好的に振る舞って欲しい。同伴者の印象も僕への評価になるからね。ゆくゆくは僕の会社の評判にも繋がる」
来生は美夕が了解したと頷いたのを確認すると、先を続けた。
「プレッシャーをかけたいわけではないが、大事なことだということは分かって欲しいんだ。ついでに僕の恋人として仲良くしているところを見せつけてくれれば大いに助かる。家族で出席している人たちの中には、年頃の娘さんもいる。僕は非常にデリケート

な状況には陥りたくなくてね」

来生の表現は抽象的だったが、何となく事情が見えてきた。

昔から異性に関心を持たれることが常だった彼は、十年経った今も似たような状況なのだろう。

つまりは美夕は、来生に迫ってくる女性たちからの盾役も兼ねているのだ。

（なるほどね。だから、プロの俳優を雇ったのか。この役を普通の女性に頼んだら、きっとその女性は勘違いするわ～）

彼の期待に応えるべく、美夕は大きく頷いた。

「分かりました。ご期待に沿えるよう、精一杯努力させていただきます」

美夕の真剣な言葉に、来生は嬉しそうに礼を述べる。

「ありがとう、呑み込みが早くて助かるよ。じゃあ、僕は君を『美夕』と呼ぶことにするよ。君も『先輩』ではなく『鷹斗』と呼んで欲しい。依頼中は恋人らしく振る舞うから、君もそれに合わせてくれ」

（そうよね、恋人らしくといえば……）

来生の言葉に少し考えてから、美夕は口を開く。

「それでは、挨拶回りの時は先輩を『鷹斗さん』とお呼びします。会場で二人だけの時は、周囲に聞かれる可能性を考えて『鷹斗』と呼び捨てにさせていただきます。それで

よろしいですか？」

「なら、もう呼び捨てにして欲しい。どこに関係者がいるか分からないし、なり切るなら今から慣らした方が良いだろう？　他の人の前では『鷹斗』でも『鷹斗さん』でも構わないよ。その堅苦しい話し方も変えて、砕けた感じで接してくれると嬉しいな。それから――」

そこまで言うと、来生――鷹斗は、膝に手を置いて真剣な顔をした。

「先に忠告しておくが、会場で一番手強いのは僕の親族なんだ。根掘り葉掘り聞いてくるから、下手な嘘はつけない。だから君のことをいろいろ教えて欲しい。いいかい？」

親族も出席していると聞いて、それは確かに手強そうだと思った。

「もちろんどうぞ」

「美夕は俳優で生計を立てているの？」

鷹斗の質問に正直に答えた。

「いえ、私の本業はジュエリーデザイナーです。あ、違った。えっと、本業はジュエリーデザイナー、今日はバイトで派遣されたの。……こんな感じですか？」

父の会社の信用問題にもなるので演技の経験がないことは伏せつつ、言われた通り普通の話し方を心掛ける。

すると、鷹斗はホッとしたように頷いた。

「そうそう、良いね。――そうか、僕と同じでデザイナーなんだ。素敵な仕事だね。それに本業があるなら美夕をジュエリーデザイナーだと紹介出来るから、尚更都合が良いよ。出会いは高校が一緒だったから、その時に恋人だったことにしておけば、再会してすぐにこのパーティに同伴させても不自然じゃないよね」

鷹斗は美夕の顔を見つめ、反対の色がないのを確かめると話を続ける。

「二ヶ月前まで、僕は仕事で海外だったしね。あ、これ僕の名刺だよ。僕の会社は都内にあるけど、プロジェクトの場所と期間によっては海外に出ることも多い。何だっけ、なんか諺みたいなのがあったよね。こういう再会愛みたいな状況」

「あ！　もしかして、『焼け木杭に火が付く』？」

美夕が答えると、鷹斗は嬉しそうに笑い返した。

「そうそう！　美夕と僕は学年で二年違うけど在学は一年重なってるから、この期間に付き合っていたことにしよう。僕が卒業して仕方なく別れたけど、お互い嫌いで別れたわけではなくて、将来夢を叶えたら再会しようと約束していた、こんな感じでどう？」

美夕が頷くと、鷹斗は次の質問へ進む。

「美夕は、僕が卒業した後はどうしていたの？」

「実は、あの、二年の時に母が亡くなって都内の公立高校に転校したんです――じゃなかった、転校したの。それから大学に進学したんだけど、途中でどうしてもジュエリー

デザイナーの仕事がしたくなって……退学したわ」

依頼人相手のタメ口は、思ったより難しい。少しスローなテンポで話をしないと、うっかりドジってしまいそうだ。

「その後は……日本とロンドンで専門学校を一年ずつ、あとイタリアで三年ほど……宝石店の販売員をしながら、工房で見習いとして働いたの。二年前に、日本に帰ってきたのよ」

美夕の説明に、満面の笑みで鷹斗は口を開いた。

「よし、それなら、今まで会わなかったのも不思議じゃないな。君も日本にいなかったんだし。僕は大学を卒業してから父の会社に二年勤めて――あ、僕の父の会社、『来生コンストラクション』っていう建設会社なんだけど、僕は二十四の時に独立して今の会社を立ち上げたんだ。今から四年ほど前だね。それで、ちょうど三年前から海外のプロジェクトに関わるようになった。だから、すれ違いというわけだ」

鷹斗は堂々とした態度で説明する。確かに彼は高校の時からこんな感じで大人びていた。

（あっ、でもすれ違いって……）

「でも……それなら、私たち……どうやって再会したの？」

「そうだな……夢を叶えた僕が君を探して迎えに行った。君も僕を待っていた、でどう

かな？　これなら今、僕らは再会したばかりのお互いに夢中な恋人同士だ。どう？　何か付け足すことある？」

「わあ、ドラマチックな設定ね。よし、分かった。あ、一つ足りない情報があったわ。えっと……私は自分のブランドを本格的に立ち上げて、三年近くになるの」

鷹斗の提案が思ったよりずっとロマンチックで、その設定にぐっと惹かれた。

（なるほど、運命の再会を果たした、お互いに夢中な恋人……ね）

溜息が出るような切なくて甘い恋……、鷹斗が相手ならなりきれる気がする。

――あっ、そういえば、恋人、といえば……

「あの、恋人役だっていうから、それらしく見えるかと思って持ってきたのだけど」

パーティ用のハンドバッグから小さな箱を取り出し、鷹斗に見せた。

「このアクセサリーの中で好みのものがあれば、つけてみて欲しいんだけど……」

鷹斗との再会にあんまり驚いてしまって危うく忘れるところだった。

それは今日のパーティで恋人と思われやすいよう用意した、美夕がデザインしたペアのネックレスやリング、そして男性用ジュエリーだ。演技にいまいち自信のなかった美夕が、その演出効果に期待していたことは内緒である。小さな箱にはシンプルな金と銀のネックレスや指輪、凝ったカフリンクス、色鮮やかなネクタイピンなどが詰まっている。

箱の中身を見た鷹斗は感嘆の声を上げた。

「すごいな、これ全部美夕のデザインかい？　今日のそのドレスとネックレスもすごく似合ってると思ったけど……本当にデザイナーなんだね」

鷹斗は中を覗（のぞ）き込み、真剣に吟味し始めた。

「美夕の今つけているネックレスは色合わせがいいから、そのままでいいと思うよ。ペアのものをつけるより、僕はこっちの男物がいいかな」

いくつかジュエリーを取り出しては、指先で触れている。

「セミフォーマルでタイはしないから、これとこれでもいけるかな。ネックレスなんてしたことないけど、恋人がジュエリーデザイナーだったらつけてもおかしくないよね」

そう言って、鷹斗は鷹の羽を模したホワイトゴールドとブラックオニキス、サファイアで作られたネックレスを手に取り、お揃いのカフリンクスに指輪も選んだ。指輪を嵌（は）めて、その凝った一点もののデザインにやたら感心している。

「これ、いいな。ちょっと待ってて、シャツを替えてくる」

奥のベッドルームに消えた彼は、しばらくしてシンプルだが上質の無地のシャツに着替えて戻ってきた。リビングの壁にかかった大きな鏡の前で、ネックレスがよく見えるように前ボタンを外している。

カチッとカフリンクスをつけ、上品なジャケットを羽織ると、初めからコーディネー

トされていたかのようにアクセサリーが映えた。まるで映画スターだ。
（わあ、デザインした時のイメージにピッタリ）
素直な称賛を湛えた表情をする美夕に、鷹斗は鏡越しに優しく笑いかけてくる。
「これ全部気に入ったよ。僕に誂えたような鷹のデザインだし。美夕さえよかったら、買い取ってもいいかい？」
「ええ!? ありがとう、でもそんな気を使わなくていいわよ……セミフォーマルのホテルのパーティだって聞いたから、恋人らしく見えるかなと思って持ってきただけだから。えっと、ほら、一つでも身につけてもらったら、宣伝になるかもだし。だから買い取る必要はないのよ」
（でも確かに先輩、お似合いだ。お金に余裕があったらプレゼントしてもいいくらい……）
そんなことを考える美夕を、鷹斗は笑ったまま引き寄せた。
「僕が買い取りたいんだよ。ほら、素直に、『鷹斗、お買い上げありがとう』って言いな」
鷹斗のあえて軽い調子にした言葉に、思わず微笑が零れる。
「鷹斗、ありがとう。でもこれって、結構高いわよ？ 素材のオニキスはともかく、18Kホワイトゴールドとサファイヤを使ってるし……」

鷹斗が選んだのは、一見シンプルだが、素材の色を上手く活かしたデザインで、美夕の手持ちの中でも最上級の値段のものばかりだ。
「はは、心配してくれるんだ。大丈夫、このスイート三泊分の値段ぐらいまでだったら現金で払える。足りなければ銀行から引き出すさ」
（ええ？ このスイートって、すっごく高いよね？ その三倍って……）
呆気に取られた美夕の腰を抱いたまま、鷹斗は耳元でささやいた。
「ちょっとだけ、美夕が慣れるように触るよ。自然にリラックスして、僕たち、恋人同士なんだから」
独特の艶のある声にささやかれて、身体に甘い痺れがぞくっと走る。それに気を取られた隙に、鷹斗は魅惑的な香水が仄かに香る胸元に、美夕をそうっと抱き込んだ。
（ああ……この懐かしい感じ、やっぱり妄想じゃなかったんだ）
思わず顔を鷹斗の広い胸元に、甘えるように擦り寄せてしまう。
十年前にも、こんなことがあった――それまで話したこともなかった鷹斗とのやりとりを、美夕は彼の腕の中で思い出した。

◆◇◆

十年前の春。

三年生の卒業を見送った後、一年生と二年生の学級委員は全員残って、講堂の後片付けをするのが慣例だ。

なのに、狭い倉庫に入って椅子を積み重ねていた美夕は、いつの間にか一人になっていた。

（ちょっと、何で誰もいないのよ！）

相棒であるはずのもう一人の学級委員の姿が見えず、あんの野郎、またサボりか、と半分諦めた時、遅ればせながら誰もいないことに気付いたのだ。作業に熱中していて、うっかり周りが見えなくなっていた。他のクラスの委員たちは揃いも揃って、誰かが最後までやるだろう、と一人、また一人帰っていったのだろう。

（えっ、そんなのってあり？　これじゃあ私、帰れないじゃん）

倉庫の外に山と積まれた椅子を見て、美夕はげんなりした。いっそ帰ろうかとも思ったが、元来物事を途中で放り出すことが出来ない性格だ。美夕は深々と溜息をつき、黙々と椅子を倉庫に運んではきちんと積んでいく。適当に積むと椅子が倉庫に入りきら

なくなることを、行事のたびに後片付けに駆り出されていた美夕はよく知っていた。

（はあ〜、ついてないなあ、今日は早く帰れるから買い物に行こうと思ってたのに……）

椅子を積んで、さあ次の椅子を取りに行こうと振り返り、出口に向かうべく歩き出す。すると、ちょうど誰かがドアから入ってきた。

背の高い男子生徒の顔を認めた途端、美夕は目を丸くした。

その男子生徒は、校内の超有名人だったからだ。

彼の優れた容姿と成績はもちろん、テニス部の元キャプテンという肩書き、そして落ち着いた態度は遠くからでも目立つものだった。女子生徒の間では〝王子〟と呼ばれている人だ。

フルネームは来生鷹斗。二学年上のその人は、今日、卒業したばかりのはずだった。

彼は誰もいないと思って入ってきたらしく、目を丸くして彼を見ている美夕に気が付くと、慌てて「ごめん」と出て行こうとした。が、ここで会ったのも何かの縁、逃がすものかと美夕は声を掛けた。

「あ、あの、手伝ってくれるんじゃないんですか？」

声を掛けられた鷹斗は、「え？」と言って周りを見渡した。で、一目で状況が呑み込めたらしい。面白そうにくっくっと笑いながら言った。

「君、もしかして、要領悪い？」

（わあ、すごくかっこいい声。噂は本当だったのね）
その甘く低い独特の艶のある声を初めて間近で聞いて、美夕はさらに目を大きく見開く。
だがその直後、彼の言葉の意味を理解し、反射的にちょっと怒った声で言い返していた。
「ほっといて下さい。からかいに来ただけなら、邪魔なので帰って下さい」
「そんなに怒らないでよ、子猫ちゃん。ほら、ちゃんと手伝ってあげるから」
……今、この人は、自分を何と呼んだ？
（こ、子猫ちゃんって）
そんな風に呼ばれたのも初めてだけど、こんな風に男子生徒にからかわれるのも久しぶりだ。それに、何で子猫ちゃんなのよと内心首を傾げる。
すると、何がおかしいのか、鷹斗は倉庫の外の椅子を取りに行った美夕の後を笑いながら追いかけ、椅子運びを手伝い始めた。
ちっとも悪びれた様子も見せず、椅子を要領よく積み上げていく姿に美夕は呆れながらも、ちゃんと手伝ってくれているので一応お礼を述べる。
「ありがとうございます。みんな逃げちゃって困ってたんです」
「そりゃそうだろ、こんな面倒くさいこと。よく君は逃げなかったね？」

鷹斗の言葉に、美夕は溜息をついた。
「逃げるタイミング逃しちゃって、気が付いたら一人だったんです」
「ははは、そりゃ、運が悪かったね」
美夕の表情がよっぽど面白かったのか、鷹斗は目尻に溜まった笑い涙を拭いながら椅子を取りに出て行く。すると、突然ピタッと止まり、壁の照明のスイッチを切ってゆっくりドアを閉め始めた。
（えっ、何してるの、この人？）
美夕は話しかけようとしたところで、鷹斗の必死な様子に気付いた。彼は振り返ると口に指を当てて、「しっ、黙って」と合図をしてくる。
（何なの？　どうしたの？）
暗くなった倉庫に、一瞬不安を覚えるが、鷹斗の必死な表情を見て何か理由があるのだろうと、黙ってその場で待つ。ドアを閉め終わった鷹斗は、抜き足差し足で近づいてきて美夕の腕を取ると、椅子の間の狭い空間に一緒に入り込んだ。
すると、外から大勢の女の子が呼びかける声が聞こえてきた。
「来生くーん、どこ～」
「センパーイ、ボタンくださーい」
「帰っちゃったのかな～」

（あ〜、なるほど、彼女たちから逃げてきたわけね）

事情が呑み込めると、狭い椅子の隙間に二人して隠れてやり過ごそうとしているこの状況が、だんだんおかしく思えてくる。

（ふふ、年上だけど、何だか可愛い。噂で聞くほど、遊んでるようには見えないけど……でも、場慣れしてるというか、この態度は高校生には見えないなあ。なのにとっても話しやすい……）

美夕は父がバーを経営している関係で、いろんなタイプの若い役者や大学生ぐらいの年齢のバイトを見慣れていた。その美夕から見ても、彼の態度は同級生や他の上級生とは比べ物にならないほど落ち着いている。腕の中の美夕がリラックスしたのに気付いたのか、鷹斗は耳元で小さくささやいた。

「みんながいなくなるまで、じっとしてて」

声優並みのイケメンボイスを耳元でささやかれ、美夕の身体にぞくっと甘い痺(しび)れが走った。

（何この声、すごく好きかも）

身体に回される力強い手や、鍛えられてがっしりした硬い胸にスッポリ包み込まれると、なんだか安心する。思わず顔を彼の胸に擦り寄せ微笑んだ美夕に、鷹斗は優しくささやいた。

「子猫ちゃん、こっちを向いて」

なあに？　というように、美夕は素直に顔を上げた。お互いの細かい表情は、小さな明かり取りの窓一つではうっすらとしか見えない。そんな薄暗さの中、美夕はいつの間にか鷹斗に口づけられていた。

（えっ、何、私……キスされてる!?）

美夕は突然のことに、心からびっくりした。

少し開いた唇に鷹斗は優しく吸い付き、舌の先で甘えるように美夕のふっくらした唇をそっと舐める。

そんな鷹斗からの突然のキスにどう反応したらいいのか、美夕は本当に分からない。頭の中ではクエスチョンマークがワルツを踊り始めていた。

（ど、どうしよう？　どうすればいいの？　そもそもどうしてこんなことに!?）

名前しか知らない男子生徒に、今キスをされている。

こんな状況であれば、相手の身体を押し返すなり引っぱたくなり、イヤーと叫んで逃げ出してもおかしくない。そう思うのに――

信じられないことに自分は嫌がっていない。嫌悪感どころか抵抗感さえ湧いてこない。そう感じるからこそ、余計に頭の中が混乱してしまう。

（私ってばっ、どうしてこんな気持ちになるの――？）

チュッと音を立てて唇を啄(ついば)まれるたびに、心が陶然として、同時に切ない想いに囚われる。

鷹斗はまったく知らない人なのに、重ねられるキスがまるで「僕を知って欲しい。君も心を開いて」と語りかけてきているようだった。

息継ぎのために彼の唇が束の間離れると、その甘い切なさに突き動かされ、再び重なった唇に美夕も応(こた)えていた。二人で唇を吸い合っては甘噛みをした後、優しく唇を舐め合う。そんな風に自然とキスが深まる。

「来生くーんいないの～？」

「来生センパーイ……？」

女の子たちの声が次第に遠ざかっていく。けれど、二人ともお互いの熱い息遣い以外は、もう何も耳に入ってこない。

「んっ、っ、んっ……」

甘いキスを長々と交わしていると、彼をよく知っているような気さえしてきた。そしていつしか、その安心感や懐かしさに心が温かく包まれる。

鷹斗の男らしい大きな手は美夕の頭の後ろを支え、美夕の細い手は彼の背中に回る。壁にもたれて安定感を得た美夕は、我知らず鷹斗を自分の方に引き寄せた。鷹斗もその身体を支えるように、美夕の背中から腰に向かって手を下げていく。

そうしてお互いの身体をぴったり合わせた二人は、何度も何度も角度を変え、さらに心が温かくなるようなキスを交わした。

美夕はもう今がどういう状況なのかさえも忘れ去っていた。それどころかもっと……という抑えがたい要求に心が囚われそうになる。けれども、鷹斗が不意に動いて身体をぐっと押し付けてくると、ようやく頭の片隅で理性の警鐘が鳴り出した。それと共に、コツコツ、パタパタ、と複数のハイヒールと靴の足音が外から聞こえてくる。

近づいてくるその音にやっと我に返った二人は、ハッとお互いを見つめながら離れた。その拍子に美夕は脚を思い切り椅子にぶつけてしまい、慌てて屈み込む。

「いっ、痛……」

（イッター、どうしよ、動けない……）

鷹斗は素早くドアを開けると、「大丈夫かい？」と美夕の側にひざまずいた。

同時に、講堂に数人の教師が入ってきた。

「おう、来生じゃないか。お前こんなところで、何してるんだ？」

「村田(むらた)先生。ちょうどよかった、椅子を片付けてた下級生を手伝ってたんだけど、椅子に脚をぶつけたみたいで。今、保健室開いてる？」

堂々と答える鷹斗に、生徒が怪我をした、と聞いた教師たちが急いで向かってくる。

頬を染めて涙目でうずくまっている美夕を見て、大丈夫か？　と声を掛けてきた。す

ると、騒ぎを聞きつけた何人かの女生徒が講堂を覗き込み、鷹斗を見て声を上げた。
「先輩！　こんなところにいたんですか！」
「――先生方、すみません、ちょっと急いでるんで、あとお願いします。失礼します」
しまった、という顔をした鷹斗は、教師たちに礼をし、ドアから急いで出て行った。
彼を追いかけていく女生徒たちに教師たちも苦笑いで、「あいつも大変だな」と同情するように呟いていた。
結局、足の先をぶつけた美夕はしばらく痛くて歩けず、保健室まで教師に付き添ってもらった。そして家に帰る途中も帰ってからも、鷹斗と交わしたキスが忘れられなくなっていた。ふとした拍子に思い出すたびに顔が火照ってくる。
交際経験のなかった美夕にとって、それはまさに衝撃の初キスで。
――同じ高校の先輩とはいえ、恋人でもない人と初めて会話を交わしてから、十分も経たないうちにキスって――
美夕は自分のしたことが信じられなかった。
確かに彼独特の雰囲気や容姿には惹かれるものがあり、かっこいいと見惚れたことはあった。それにしゃべってみて案外可愛い、とも思ったけど……
十六歳だった美夕は、初キスは好きな人とロマンチックなシチュエーションでと夢見ていたのだ。キスとは相手をよく知って好きになってからするもので、付き合ってもい

ない人となんて考えられない。そんなコト気持ち悪くて論外、だったはず――。なのに、一体どうして……あの状況で嫌がるどころか、鷹斗のキスに反応した自分がまったく理解出来ない。
だけど、こうして思い出しても、やはりあのキスはお互いを信頼して会話を交わしているような心が温まるものだった。
（私、全然嫌じゃなかった、よね……？）
何しろ、二人の気持ちが溶け合ったように気持ち良くて、途中で止めたいとも思わなかったのだ。
もしあそこで教師が来なければ、自分たちはどうなっていただろう。
その先なんて想像出来ないけれど、なんだか胸のドキドキがずっと止まらない。
そして、それが二人の最後となったのだ。それからしばらくして、美夕の母が入院することになり、美夕は高校を転校した。
その後気付いたのだが、二人の分かち合った時間を証明するように、美夕の制服のポケットにはなぜかブレザーのそれと思われる小さなボタンが残されていた。

◆◇◆

その日から、美夕は鷹斗とのキスを夢でよく見るようになった。

その夢は、美夕がジュエリーデザインを勉強している間もずっと続いた。初めて恋人と呼べる人が出来て、その人とキスを交わしてからも続いた。

しかも最悪なことに、恋人とのキスに美夕はそれなりの反応しかせず、鷹斗と交わしたような情熱を煽ってくるキスは誰とも再現出来なかったのだ。

もちろんだが、美夕も相手を好きになってお付き合いを始める。けれども、好意を抱く相手に対しあまりにも反応の薄い自分に、いつしか、あの時感じた感覚は夢見て作り上げたものに違いない、きっと現実ではなかったのだと思うようになっていた。さらに、もしかして自分は不感症なのかも……とも。

（十六の時に初めて交わしたキスの方が、大人になって恋人と交わすキスより感じた、なんてありえないよね……？）

好きな人とキスするのは、嫌じゃない。嫌じゃないけど……あんまり好きでもない。

軽いキスならともかく、大人のキスなんてヌルッとして、まったく気持ち良さを感じない。

（……こんなんで私、まともな恋愛出来るの……？）

恋人とのキスに軽い嫌悪感を覚えて、落ち込んでしまうこともしばしばあり、結局破局を迎える。

そんな恋愛と言えるかも疑わしい交際の繰り返しで、美夕はすっかり自分を恋愛音痴だと思うようになった。周りも、長続きしない美夕をそう認識している。それにここ数年は、お付き合いすることさえ遠ざかってしまっていた。

だがここに来て、初キス相手であり、高校の先輩である鷹斗の恋人役を務める、なんてことになったわけだが……

演技のためとはいえ、鷹斗にホテルでそっと抱き込まれる美夕の鼓動は、自身でもびっくりするほど高鳴っていた。長らく感じなかった予感めいたときめきが、胸を掻き乱す。

（……やっぱり、この感じ――あの時と、まったく同じ……）

今、鷹斗に優しく抱き込まれただけで、心が心地よさに包み込まれる……

美夕は今度こそ、はっきり悟った。その昔、一度だけ鷹斗とキスをした時に抱いた安心感や懐かしさは、妄想ではなかったのだと。

鷹斗の匂いや、背中に回った男らしい大きな手に、硬く頼もしい胸。それらすべてが美夕の感覚を呼び覚まし、幸福感がさざ波のように胸の奥まで浸透していく。

（ああ、なんて懐かしい――）

美夕は顔を鷹斗の胸に擦り寄せ、無意識に甘えていた。

鷹斗も美夕の柔らかく艶のある髪を優しく撫でながら、物足りなさを感じたのかゆっくり言葉を紡ぎ出す。

「長い間、会えなくて本当に寂しかったよ。もっと早くに会いに行けなくてごめんね。だけどこれからは違う。会社は軌道に乗ったし、一緒に過ごす時間を増やそう。今日はパーティに出席してくれてありがとう」

聴き心地最高の美声が、心のこもったセレナーデのように甘く語りかけてくる。美夕の意識はたちまち目の前の鷹斗に惹き込まれた。それと同時に、依頼のことを思い出す。

そうだ、懐かしさでぼやっとしている場合じゃない。恋人役なのだから、彼が提案してくれた通りにちゃんと答えなくては。

「……私も、鷹斗に会えなくて寂しかった、今日は一緒に過ごせて本当に嬉しい」

鷹斗の低く甘い声で告げられる言葉に、自然に答えている自分がいる。

（出来るじゃない、私。お芝居はもう始まってる。私は鷹斗の恋人、この人に長い間会えなくて寂しかった）

美夕も力を込めて鷹斗の大きな身体を抱き返した。再び頬を擦り寄せ甘える美夕の仕草に、鷹斗は髪を撫でていた手を下ろし、その頬の感触を確かめるように長い指で優し

く辿る。最後に顎の下をくすぐるように撫でると、優しく持ち上げて、チュッと素早くキスをした。

（えっ……きゃー、慣れすぎでしょ、この人！）

流れるような自然な動作で唇にキスをされてしまい、ドキンと心臓が跳ねた。速まる鼓動と共に頬がみるみるピンク色に染まる。

それでも、ここで狼狽えるわけにはいかない。恥ずかしさを押し込めつつ精一杯平気な顔をし、優しく腕を取ってドアへエスコートする鷹斗を見上げた。

（でも私、演技とはいえ、やっぱり嫌じゃない。むしろ……）

口に出来ない想いは心に秘め、鷹斗に合わせて歩いていく。――のだが、美夕の態度は傍目にはいかにも恥ずかしい、けど、〝恋人の突然の愛情表現に頑張って応えています〟感がいっぱいで、実に初々しかった。見ている鷹斗の顔に思わず微笑みが浮かんでくるほどに。

鷹斗の上機嫌な様子に、上手く出来たみたいと美夕はホッとした。そしてそのままエレベーターのボタンを押す彼の横で大人しくその腕に身体を預けた。

二人は自然とじゃれ合いながら、腕を組んで会場の受付へ向かっていく。

「美夕の髪って、手触りいいな」

「鷹斗、そんなにしたら、ほつれちゃう」

いかにも恋人らしく彼に微笑みかけ歩いていると、かすかに流れてくる優雅な音楽と楽しそうな人々の談笑が会場の外まで聞こえてきた。開いた扉からは、大きなパーティ会場が見える。きらびやかに着飾った人々ですでに埋めつくされているそこは、一人だと物怖じしてしまいそうなほど広い。

けれども、隣には頼もしい鷹斗がいる。そして今夜の美夕は、鷹斗が夢中になっている運命の恋人なのだ。美夕は、大丈夫よ、上手く演ってみせると心の中で自分を励ました。

そうして、シャンデリアのまばゆい明かりの下でシャンパングラスがキラキラ光る会場に、二人は開場時刻より遅れて入った。だが、その豪華さに気をとられる暇もなく、扉をくぐった途端にさっそく声が掛かる。

「来生さん。お久しぶりです。どうです、その後は……？」

さあのっけから、お仕事だ。美夕はさっと気を引き締めた。

「あちらでお父様にお会いしましたよ」と続ける男性は、すぐに美夕にも会釈をした。

「ところで、こちらの美しい女性は、来生さんのお連れの方ですか？」

「ええ。僕の婚約者の雪柳美夕さんです。美夕、こちらプラント配管や管工事業を主に手がけている、セタヤ総合設備株式会社社長の永江さんだよ」

最初に挨拶に訪れた男性に、美夕は流れるような調子で紹介された。

「初めまして、雪柳と申します。お会い出来て光栄です」

丁寧にお辞儀をして挨拶を述べた後、一瞬の間があいて鷹斗の言葉が頭に入る。あれ？　てっきり〝交際相手〟だと紹介されると思っていたのに!?

（先輩、話が違うっ！　〝恋人〟じゃなかった？　〝婚約者〟って……どうなってるのっ？）

美夕は動揺するものの、にこやかに笑った顔の表情はもちろん崩さない。その首筋がほんのり染まり、むしろ初々しさと愛嬌が増す。

「いやあ、こちらこそお会い出来て光栄です。初めまして、永江です。今日は来生さんが、お一人でないので驚きましたが――」

穏やかな様子のまま、当たり障りのない会話を続ける男性二人の隣で、あくまでニコニコ顔をキープ。けれども――！

いかにも興味深そうに相槌を打つ、一見穏やかな態度の美夕の脳内は……はっきり言ってパニックだった。

いや、もしかして自分は緊張のあまり鷹斗の言葉を聞き間違えたのかも……？

咄嗟にそう思った美夕の耳には、「それで、ご結婚の予定などはいつ頃ですか？」と問いかける声が聞こえてくる。すると鷹斗は、嬉しそうに「そうですねぇ」などと答え

ているではないか。

美夕は、聞き違いじゃなかった！　と胸中で叫んだ。

（え、えぇぇっ!?　どうして婚約者!?）

「今時分は結婚式の形式も……」とやけにリアルな会話をのんびりと続ける鷹斗に、一体いつの間に自分たちの関係は、婚約までひとっ飛びに進展したのっ？　と大声で質問したい。

「美夕も僕も、今まで仕事が忙しくて、まとまった時間を取るのが難しくて……」

――などと、どんどん話が進展し、そればかりか鷹斗は愛おしそうに手まで握ってくる。さらに、だ。

「式は早い方がいいよね、美夕？」

と返事を求められては、呆けた顔を晒すどころではない。

しかもパニック気味の美夕を余所に、こちらに向かって人がどんどん集まってくる。

「来生さん、こちらでしたか」

「これはこれは、ご無沙汰しております」

途切れなく挨拶に訪れる人々に、とてもじゃないが、鷹斗にその真意を問いただす暇などなかった。鷹斗の横で、美夕は必死に、だがニコニコと上品に笑い続ける。

（また来た！　どうしてこう、次から次へと人が寄ってくるの？　先輩はこっちから挨

立ち読みサンプル
はここまで

拶に行くようなことを言ってたのに……）

しかも、どの人も美夕にも目を向け、挨拶を兼ねた質問をしてくる。

それに笑って答える鷹斗も、例に漏れず「僕の婚約者の……」と同じセリフを繰り返していた。

こうなるともう美夕は、最初に感じた動揺など微塵も見せず、愛想よく笑って挨拶を交わすしかない。何度も繰り返していると、しまいには、鷹斗の婚約者と書かれた名札を付け歩いている気分になる。

そしてついに開き直り、ニッコリ余裕の笑顔で挨拶を返すだけでなく、世間話にちゃんと参加出来るまでになっていた。

それにだ、鷹斗の知り合いだらけらしいこのパーティ会場で、迂闊なことは言えなかった。

依頼人である鷹斗の顔に、泥を塗るような真似は絶対出来ない。

臨機応変に応じるのも仕事のうちと考え、〝ええ、そうですとも私が鷹斗さんの婚約者です、幸せいっぱいです〟というニコニコ顔を徹底して維持することにした。

こうして婚約者問題は無事に美夕の意識外に追いやられ、現実的な問題に心が向かう。

……この広い会場で、いまだ入り口付近で足止めとは。今夜は会場のどこまで進めるのか……？